

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成23年10月13日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 文学研究科

職 名・学 年 博士課程 1年

氏 名 齋 藤 有 哉

助 成 の 種 類	平成23年度 ・ 在外研究短期助成		
研 究 課 題 名	ギリシア語プロソディの通時的研究		
受 入 機 関	テッサロニキ・アリストテレス大学 文学部附属現代ギリシア語センター		
渡 航 期 間	平成23年 8月15日 ～ 平成23年 9月15日		
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	450,000 円	
	使用した助成金額	450,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助成金の使途内訳	旅費(往復航空運賃)	223,480 円
		その他宿泊費等	226,520 円
		不足分は私費を使用	

ギリシア語の通時的音韻変化を記述・説明するための予備的考察

京都大学大学院・文学研究科 行動文化学専攻 博士課程1年 齋藤有哉

1 序論

本稿はギリシア語の通時的变化を記述することを第一の目的とする。また、基本的には文献の残る古代語（とりわけ古典期アッティカ方言およびコイネー）から現代標準語に至る過程を考察の対象とするものである。

2 本論

古代ギリシア語は、古典期には音の高低によって語（句の境界）を弁別する、いわゆるピッチアクセントであったとされる。このことは文献（それも、後代の文法家の手になるもの）への記載からしか確認できないため、真偽のほどは確定的ではないが、記述の内容がピッチ差の度数を示すなど具体的であるため基本的には受け容れられている。

この通説に従えば、ギリシア語はその歴史の中でアクセントの音声実体を音の高低から音の強弱へと変化させたことになる。このような音声・音韻変化は分節音の分布からの推測でしか跡付けられないことが多く、この点では確かにギリシア語もその分布に一定の変化を見せている。もちろんこのことは音声というメディアの性質上原理的にやむをえない。一方で、重要なことは、ギリシア語はアクセントの音声実体や分節音の分布とは異なり、アクセントの位置という観点からは極めて保守的であることである。以下に動詞アクセントの比較を挙げるが、古代には音韻的に決定可能とみなされているアクセントが現代では語彙的にしか指定できない。

(1) ἀγαπάω / ἀγαπῶ (古代語)

ἀγαπῶ / ἀγαπάω (現代語)

ここにみられる定動詞のアクセントは語末の音節量から自動的に導かれる。しかし、現代語のアクセントは語彙的に「古代語では母音語幹であった動詞」と指定するしかない。このことは古代においては不必要であった情報をもレキシコンに記載してまでも、古代語のアクセント位置を保存しているといえる。

また、上記に関連して、clitic（以下、接語とする）のアクセントにおいても古代語と同様の規則（ないし制約）が存在していると考えられる。すなわち、以下のアクセントをとる。

(2) ὁ ἀνθρώπος τις (古代語)

το ποδήλατό μου (現代語)

(Δημήτρης 2005: 44)

これは、アクセントの変化に伴う分節音の歴史的変遷と合わせて考える必要があると思われる。なぜならば、音韻的な音節量の対立が失われたことに伴い、同じ制約が働いていると思われるこの現象に対し、現代標準語ではきわめて単純な定式化を与えることが可能だからである。

以上のことから、ギリシア語のプロソディの通時的変化はそれに伴う分節音の変化と軌を一にするものであることがわかる。一方で、それにもかかわらずアクセント実現はピッチからストレスに推移したとされている。ただし、そもそも現代ギリシア語における広義の、プロソディ実現において、強勢位置とピッチの上昇はほぼ例外なく一致するという事実に注意することが必要であると考えられる。そして、これに付随して興味深いことは、現代ギリシア語学習者のしばしば犯す間違いに強勢音節以降全ての音節（ないしモーラ）のピッチが上昇し続けることがあるが、ギリシア人の発音は明らかにそれとは異なる。すなわち、強勢音節が、そしてそののみがピッチの上でも上昇を示していることになる。

これは、古代語のアクセント実現自体が実際にピッチアクセントであったかどうかについて多大な考察の余地を与えてくれるものであるように思われる。ストレスアクセント言語では音節量が非弁別的である傾向が指摘されることもあるが、実際にはそれに必ずしも従わない言語も多数存在する。とはいえ音節量対立が体系の極めて広範囲にみられることから、ただちに古代ギリシア語がそのような言語に含まれるとは考えにくい、アクセントの在り方自体は極めて多くの制約を受けていることから、広い可能性を視野に入れ続ける必要がある。

3 結論

以上の考察から今後に対して言えることは、ギリシア語の音韻変化の歴史をたどることは、歴史的に残る最古級の言語であるという点からもそれ自体が興味深い、さらにそもそもピッチアクセントとストレスアクセントという種類の違いが言語学的にいかなる意味を持つものなのか、そしてアクセントとイントネーションという一般的には区別される 2 種類の超分節素の機能的側面に対して、その区別の本質に迫る端緒を与えてくれるといった、理論的貢献も大きなものがあるように思われる。

最後ではあるが、このような調査の機会を与えてくれた京都大学教育・研究振興財団に篤く感謝申し上げます。

参考文献

Δημήτρης, Μπαλιάτσας. 2005. Γραμματική της Νεοελληνικής Γλωσσάς. Αθήνα. ENNOIA.